

推薦レポート

田邊和子先生推薦

田邊先生のご推薦で、2020 年度日本語 I b クラスの課題作文を掲載しております。日本語 I b クラスは 1 年生向けの留学生科目で、論理的に組み立てられた文章によって、論拠を示し、説得力のある文章表現力を習得することを目標としています。

掲載しておりますのは、2020 年度 4 月、6 月、1 月に書かれた 3 本です。遠隔授業のハンディを乗り越え勉学に励み、日本語力や思考力が向上したことが分かる内容となっております。

4 月

私の大切なもの

安 晶 敏

私にとって大切なものは、自分自身である。おそらく「大切なもの」ということはお金で買えるとか同様にどこにも存在するといったものではないと考えるからである。

勿論、どこにも存在しない、すなわちかけがえのない存在として家族や友だちもいる。また、彼らも私にとって大切な存在である。だが、あえて「自分自身」が大切だと述べた理由は、今まで頑張ってきたことも、そしてこれからも頑張ろうと思っていることも正に自分自身を大切に思うから、自分自身を不幸にはさせたくないからである。

自分自身を大切にすることと「ワガママ」なこととはまったく違う。自分自身を大切にすることは、自分の人生に対して前向きに進めていくことである。これは「自分が全てだから他人のことは無視しても良い」という意味ではない。真の意味で自分を大切に思っている人なら、他人も自分のように大切であるという理解ができるはずだ。

したがって、私は自分自身のことを大切にしながら、同時に他人のことも心から大切に思いながら、自分らしいイキイキした人生を歩んで行きたい。

6月

紹介文 2 ①人物紹介（自分の紹介）

安 晶 敏

今まで生きてきた人生はあまり長くはないが、その中でも徐々に変化してきたことは「考え方」である。中学生の頃から現在に至るまでの考え方の変化について具体的にどのように変わってきたのかを中心に自分の紹介をしてみたいと思う。

中学生の頃の私は、一言で言うと「不安定」そのものであった。本当の自分自身を大切にするより、そのときに流行っていたこと、またはおしゃれだと思ったことに自己投影して、それが自分自身のことだと考えた。実際に2年生のときには、女優が夢であるクラスメートを見て、単純におしゃれな職業だと思って自分の夢も女優だと勘違いしたこともある。さらに、人におしゃれに見られたいという思いにより、見た目という基準で友だちを付き合ったこともあった。だが、皮肉なことによいような思いの基底には、「自分は素敵じゃない」という考え方があった。すなわち、自分に自信がない、でもそれを人にバレたくないで隠すための「偽りのおしゃれ」だったのである。そもそも偽りのおしゃれを通して自分の価値を高めるなどできるわけがなかった。

中学校を卒業した後は女子高校に入学することになった。中学校は共学だったので、女子高校は私にとって新しい環境であった。女子校では同じ年ごろの男性がいない分、非常に居心地が良く、気楽に過ごせた。その環境の影響もあり、自己啓発に興味を持ち始めてから、私は偽りのおしゃれはやめて本当の自分自身になろうと決心した。自分自身の不足なところは素直に受け止め、自分を大切にし、同時に他人のことを心から大切に思うように努力した。

その結果、最も大きな変化は人と比較しなくなるようになったことである。もはや人におしゃれに見られることは自分自身にとって重要な事柄ではない。私は自分自身のペースで自分が決めた道を歩んでいけば良いのだと思うからである。また、他人を心から大切に思うことにより、気の合う友だちもできるようになった。

本当の自分自身になるためには、自分自身について知る必要がある。そして自分自身を知ることとは決して簡単なことではない。しかし、自分の人生は自分が決めるべきものなので、今後も積極的に自分自身と向き合いながら、本当の自分で生きていきたいと思う。

1 月

質より量か、量より質か

安 晶 敏

構成メモ：

序論	背景説明	質より量、量より質、どちらが大事なのか。
	問題提起	そもそもどちらがより大事というのは決められない。
本論	論拠 A	
	意 見	そもそも比べること自体が不思議である。
	データ	「量と質」の関係は、「努力と結果」の関係と非常によく似ている。
	論拠 B	+ 混合研究法が必要とされるようになった背景
	意 見	だが、「質より量」という考え方を持つことは重要だ。
	データ	「量」を重ねていくことで「質」が形成されていくからである。
	論拠 C	
	意 見	最初は「量」をこなすことを目指す必要がある。
	データ	はじめは誰もが初心者であるため、最初には「質」など分かるはずがない。
	結 論	「量」をこなせば、「質」が生まれ、向上される。
結び	まとめ	両方追求できれば良いが、そこまで実力が達していない場合、「質より量」を優先した方が良い。

I 序論

よく「質より量」や「量より質」といった言葉を様々なところで耳にすることがある。質の方が量よりも大事だと考えている人もいれば、その逆、量こそが質よりも大事だと考えている人もいる。

しかし、私はそもそも「量」と「質」を比べることは不思議なのではないかと、疑問に感じた。本稿では、「量」と「質」、どちらが大事なのかを比べること自体が不思議な理由と、それにもかかわらず、「質より量」という考え方を持つことは重要だと考える理由について論じる。

II 本論

まず、「量と質」の関係性が「努力と結果」の関係性と非常によく似ていることに注目したい。例えば、「量」と「質」という言葉を、「努力」と「結果」という言葉で言い換え、「努力と結果」の中でどちらがより大事かと問われたとすると、その問いに対して明らかな答えを出せる人は非常に少ないだろう。なぜなら、良い「結果」を出すことはもちろん大事なものの、良い「結果」というものは「努力」をしてからこそ得られるものだからである。また、「努力」さえしていれば、「結果」は出さなくてもどうでもいいのかというと、それもそうではない。これは「量と質」の関係でも同様であり、「質」を高めるためには、まず「量」をこなす必要がある。そして「量」がこ

なされたので、「質」はどうでも良いとは言えない。つまり、どちらがより大事だということはそもそも言えないのだ。

データ収集には、「量的（定量的）研究」と「質的（定性的）研究」という2つのアプローチがある⁽¹⁾。八田氏は「従来の研究では、ある現象に対してテキストを用いて記述し解釈する質的手法、あるいは現象を数量で捉えて統計解析によって理解する量的手法の一方を採用し、各研究分野で現象の概念化や理論化が進められてきた⁽²⁾」と述べている。しかし、「実用主義（pragmatism）の立場に立つ研究者たちが、ひとつの研究方法のみに頼る限界を認識しはじめたことで、混合研究法が必要とされるようになった⁽³⁾」（樋口 2011：107）という。混合研究法とは、「量的アプローチと質的アプローチの両方を用いてデータ収集と分析を行い、結果を統合して推論を導くという研究方法⁽⁴⁾」である。この「混合研究法」が必要とされるようになった背景を通して、やはり「量」と「質」を比べることは不思議だと考えられる。

だが、「量」と「質」、どちらが大事なのかに対する問いに、あえて答えを出すのなら、やはり「質より量」というマインドを持つことは重要だと言えるだろう。なぜなら、「努力と結果」の関係性でも触れたように、「量」を重ねていくことにより「質」が形成されていくからである。例えば、小学生の頃に掛け算を覚える時、私たちは最初にはひたすら「量」をこなしていく。この過程ができてから、私たちは効率よく掛け算で数学問題の答えを出すことができるようになる。これがまさに「量質転化の法則」であろう。量を積み重ねると、それ自体が質が変わっていく。量が増えていくと必然的に質も変わっていく。つまり、質と量という概念は完全に独立していないのである。

はじめは誰もが初心者である。初心者の時に「質」など分かるはずがない。「量」をこなし続けることにより「質」が生まれ、向上されるのではなかろうか。「量」と「質」、両方を追求できれば最も良いだろうが、そこまで実力が達していない場合、「質より量」を優先する必要がある。

Ⅲ 結び

本稿では、「質より量」か「量より質」かといった問いについて考察してきた。その結果、どちらがより大事だという答えは出せないものの、最初には誰もが初心者であるために「質より量」を優先すべきではないかという結論に至ることができた。

【参考文献リスト】

- (1) Dr.Nikita Thattamparambil (2020)「適切な研究方法を選ぶには」<https://www.editage.jp/insights/how-to-choose-the-research-methodology-best-suited-for-your-study>（最終閲覧日：2021.02.01）
- (2) 八田太一（2019）「混合研究法の基本型デザインと統合—初学者が陥りやすい落とし穴—」、『立命館大学人間科学研究所』、39 巻、49 頁
- (3) 樋口倫代（2011）「現場からの発信手段としての混合研究法—量的アプローチと質的アプローチの併用」、『国際保健医療』、26 巻 2 号、107 頁
- (4) 同上